

# 日光・二荒山考

—名義を中心に—

## 神野富一

### 一 はじめに

日本で補陀洛といえは、一般的にまず挙げられるのが熊野、そして日光である。江戸時代初期に東照宮が造営されるまでは、日光は男体山などへの信仰を基底としたいわゆる日光三所権現さんじょけんげんです。宗教的聖地であった。男体山頂の火口付近からは古墳時代の勾玉や鏡も出土しているから、その信仰は文献時代をさかのぼって古い。関東平野の北辺にあつて、夏は雷鳴をとどろかせ、冬は白皚々となる秀麗な日光の峰々を神います場所と感得した素朴な信仰は長く続いただろう。

その長い日光の宗教史の初発を語る文字史料は、性霊集にもおさめられた空海の「沙門勝道山水を歴て玄珠みかを瑩みかく碑」の文章である。そこには下野国芳賀郡の出身で、若年時から仏道修行に励んだ沙門勝道が、天応二年（七八二）三月に初めて男体山登頂を果たし、その後も中禪寺湖のほとりに住んで神宮寺を建てたと記す。また今の男体山を指して「補陀洛山」ともたしかに記している。これは日光の地が當時から補陀洛とされていた有力な証拠である。

(1) それにしても、なぜ北関東の一角である男体山がとくにそうして補陀洛山とされたのだろうか。本来の補陀洛は新訳華嚴経によれば南インドにある海上の山であり、陀羅尼集経にも「海島なり」とあつて、実際中国の普陀山は海島であり、日本の熊野那智もまた海辺の山である。関東の山である日光がそうして古くから補陀洛とされてきたことの意義をどうとらえればよいか。ここではそうした問題に、名義

の考察を中心にせまってみたい。（以下便宜上、フダラクの漢字表記を、引用部以外は「補陀洛」に統一する）

### 二 「二荒」の名義、諸説

「日光」という現在まで続く地名が、もとの名「二荒」の音読ニコウ（ニクウ）に由来するという説は、早く、鎌倉時代の偽作とされる、著者不明の瀧尾建立草創日記にみえる。「日光」の初出は保延四年（一一三八）成立の般若若經奥書といわれ、同七年成立の中禪寺私記にも「日光山満願寺」とみえ、それ以前の文献には続日本後紀承和三年（八三六）十二月条に「二荒神」とあるのを初めとしてすべて「二荒」とあるので、この説は信じてよい。「日光」は好字だが、金光明経の經文とその地の古来の日神信仰にもとづくという説がある<sup>1)</sup>。

そして「二荒」はニコウと音読する以前、フタアラないしフタラと訓まれたこともまたたしかである。古代の山名・神社名はふつう和語で呼ばれたし、延喜式神名帳の「二荒山神社」に九条家本ではフタラノと付訓している（国史大系本による）。フタアラないしフタラがその神や神社の古くからの呼称だったと認められる。

さて、ではその「二荒」（フタアラないしフタラ）という名義の意味、またその由来するところは何か、ということが以前からの一問題である。見落としがあらうが、この問題にふれる主要な説を、時代順にしばらくたどってみよう。

古く瀧尾建立草創日記には、中禪寺の鬼門の方角に「羅刹嶮」という大坑穴があつて、そこから年に二回大風が吹き出して寺や国内を破壊するので二荒と名づけた、とある。江戸初期、林羅山は「或は曰く、鷗草神武の際に在りて、二神有りと言ふ。共に夫婦と為りて、国神と名づく。蓋し荒神なり。故に山を号して二荒と云ふ。神の居る所を以てなり」(原漢文)と、男女一対の荒神の名に由来するといふ説を紹介している(二荒山神伝)。なおまた羅山は、二荒山が補陀洛山ともされることについて、「二荒の和訓、補陀洛と音相似たり。是に由つて浮屠国俗を誘て遂に補陀洛山と号するか」(原漢文)と述べている(本朝神社考)。「二荒の和訓」、すなわちフタアラないしフタラが、補陀洛と音が似ているので、仏教徒がそこを補陀洛山と鼓吹したといふ説である。江戸末期成立の日光山誌には、先の大坑穴説のほか、和名抄に下野国都賀郡の郷名に「布多」とあることを根拠に、フタという地名によるかとする説も紹介している。やや遅れて下野国誌には、「二荒」は「二現」であるとする説もみえる(以上、諸書の引用は菅原信海校注『神道大系 神社編三十一 日光・二荒山』による)。

近代に入つて、藤井万喜太氏が一九三九年の段階で古来の説を五、ないし六にまとめて紹介している。すなわち、二神示現説、観音浄土説、布多の荒山説、二大山説、二季暴風説、アイヌ語起源説である。藤井氏自身はそれらをすべて否定して、マタギ部落に見られる「根子」の地名がニコウ(二荒、日光)に転じたという独自の説をたてている。さて藤井氏の挙げたうちの観音浄土説とは、フタラの地名は観音浄土「補陀洛」に由来するというもので、開山勝道上人が初めて男体山に登頂した折、「山紫水明の勝境に恍惚として神人一如の境に入り、經典に説く観音浄土に髣髴すると感得し、山を補陀洛山と名け、後補陀洛の音二荒に訓読に近きにより、遂に二荒に転じたといふ」もので、今に有力である。その後、一九六三年刊行の『日光男体山——山頂遺跡発掘調査報告——』には近藤喜博氏の説がみられる。近藤氏は藤井論の挙げる各説について吟味を加え、うち補陀洛由来説については「補陀洛」→「二荒」という変化の順序は逆であるとし、もともと「二荒山はフタラ山と呼ばれていたからして、補陀洛山への転化が容易であった」のだとして、自身は二神示現説に拠り、二荒山の語義について、「二は男体・女貌の二山を指し、「アラ

(荒)」を「現われている」と解し、つまり「男体・女貌の二山が顕現している」意味だとした。この説は数年後、和歌森太郎氏によって、「二神の出現だから、フタアラと言ったというふうな成り立ち方はどうも認めがたい」と批判された。そして和歌森氏自身は補陀洛由来説に立ち、勝道のころの関東の仏教修行者たちが「補陀洛の地としてそこをとらえ、その縁で本来の山の神をも、かれらの側から二荒の神と称するに至った」としている。後に五来重氏も、「日光山のもの名は二荒山であり、そのもとは補陀洛山であった。「ふだらく」が「ふたら」となり二荒(ふたら)と書かれ、音読みで二荒(にこう)となった。江戸時代の学者は日光山と二荒山のおこりをいろいろややこしく考証しているが、この単純な推論がもっとも正しい」とした。

こうして二荒の名義については古来多くの説が唱えられてきた。それ自体が日光研究史の一面をものがたるともいえる。とくに二荒が先か補陀洛が先かという問題は、神道と仏道の融合・対立をも含みこんでいるようで、その様態は他者からみれば「嗚呼、二荒山の神、神か仏か」(二荒山神伝)という嘆きにもなる。

諸説の中で、現在では補陀洛由来説がやや優勢であるかのようだ。けれども、私はこの説に疑問をもつ。以下、その理由を述べよう。

一つには、現在の男体山は上代において何らかの名をもっていたろうが、補陀洛由来説によれば、それが奈良時代後期ころにフタラ山に変えられたことになることへの疑問である。上代にあって地方の名山の名が、いくら仏教徒がさかんに入り込んだからといってそうやすやすと変えられたとは思えない。

和銅六年(七一三)、風土記撰述の詔命が出て各国で風土記が編纂されたが、その詔命の中に「山川原野名号の所由」を記せということがあり、現存風土記にはその通り、多くの山名が挙げられ、古代信仰にもとづく山名の起源の説明もまた多くみられる。残念ながら下野国風土記は散逸してか断片すらも残らないが、もしそれが完成されていたとすればそこには必ずや男体山の古名が記されていたにちがいない。またその時代、現地では、神秘的な山容の男体山を神と崇め、信仰行事をとまないつつ山にまつわる何らかの神話や伝説も語られていたにちがいない。実際、男体山山頂遺跡から古墳時代の遺物として二神・獣鏡・勾玉・切子玉・手捏土器が出土

しているのは、天応二年（七八二）とされる勝道上人の登頂以前にも男体山が神祇信仰の対象とされていた有力な証拠である。山を本格的に開いたのは勝道上人だったとしても、それ以前から山の信仰は行なわれていたのである。

筑波山は古来筑波山であり、富士山もまた富士山（上代の文献では不尽・福慈などと表記されている）である。古代に仏教化した比叡山、立山、白山、箱根山なども仏教化によって名が変わったわけでない。むしろ山林修行者は、讃仰しつつ信仰の山に分け入り、山の神を権現と崇めるなどしてそこを仏教化していくのが常套であり、その場合山の名は山の神と一体として重んじられた。地方の名山たる男体山が仏教の勢力によって名を改めたというのは、山や地の名に対する古代信仰からするとありにくいことのように思われる。

しかも補陀洛由来説によれば、変えられたのは山名ばかりでなく、山と一体の神の名までということになる。神も旧名を捨てて、山の仏教化にともない、補陀洛に由来するフタラノ神となったというわけである。しかし、たとえば延喜式神名帳に記される三千百余座の神々の名をながめると、中には「大洗磯前薬師菩薩明神社」（常陸国鹿島郡）や「八幡大菩薩宇佐宮」（豊前国宇佐郡）のように仏教に由来する神名がないではないが、非常に稀である。観音の住所たるフタラが、神の旧名を否定して神名となりえたかどうか。

さらなる疑問は、補陀洛由来説は、「補陀洛→二荒」を音の類似から説明するが、その場合ことさら「二荒」という文字が選ばれた理由の説明がむずかしいという点にある。補陀洛に由来するというなら、なぜ「補陀洛」あるいは「補恒洛迦」（新訳華嚴経）などの表記のままではないかなかっただろうか。他の補陀洛、中国の普陀山、ラサのポタラ宮、韓国の洛山寺、熊野の補陀洛山寺なども思い合わせられる。この点で「沙門勝道山水を歴て玄珠を聳く碑」に「粵に同じき州に補陀洛山あり」として、「二荒山」と記していないのはかえって明解だ。けれども先に挙げた続日本後紀承和三年十二月条の「二荒神」を初めとして、六国史所載の神階授与などに関する八例はすべて「二荒神」または「二荒神社」と記され、延喜式神名帳にも「二荒山神社」とある。和歌森氏の説に「二荒」の呼称を成立させたのは勝道のころの関東の仏教修行者たちであったとするが、仏教修行者たちならなおさら「補

陀洛」に「二荒」を宛てるなどまわりくどいことをせず、もとの「補陀洛」の文字にこだわってよかつたわけである。フタラにあえて一義的に「二荒」の文字を宛てる必然性は何だろうか。従来の補陀洛由来説においてはこの説明が欠けている。

また、これに関して、国語学上の多少の疑問もある。フダラクはサンスクリット語の *Paṭala* の音写だが、仏書などの万葉仮名表記によれば、フダラク・フタラカ・フダラカのみならずフタラ・フダラなどと訓めるようにも表記されている。すなわちフダラクがフタラとも称されたことは認められる。<sup>6)</sup>ところが一方「二荒」の字は、まずフタアラと訓まれたはずで、やがて中間のア音の脱落によってフタラとなったと考えられる。つまり、フタラ（補陀洛）をただ音写するならいきなり脱落形の「二荒」は宛てにくく、たとえば「二良」「二羅」など他のよりふさわしい用字もありえたはずなのである。史料に一義的に「二荒」の文字が宛てられているのは、その文字自体がある語義を主張しているからであろう。

以上の二、三の考察によれば、「二荒」の名が「補陀洛」に由来したとする説は成り立ちがたい。「二荒」（フタアラ、フタラ）こそが勝道以前、風土記以前からの男体山もとの名、またそこにいます神の名であったろう。そして音の類似から、その「二荒」が「補陀洛」を招きよせたと考えられるので、実はそこにこそ日光が補陀洛山となった要諦があるろう。

### 三 「二荒」の名義

フタラという語は珍しい。今では知られない本来の語源をもっていたかもしれない。たとえば語構成として考えられる一つは、フタラはフトアラからの転化である可能性だ。この場合、フトは太、アラは荒であり、つまりフトアラは壮大で荒いという意味になる。<sup>7)</sup>けれども、上代のフトは名詞に冠する場合は、「純」「太たすき」「太祝詞」「太占」など神聖な物・言葉・行為につくのみで、オホ（大）などところがって神や山の形容辞にはなりそうもない。

本来の語源であるかどうかはわからないが、今可能なのは、「二荒」という表記で示されるフタアラまたはフタラについてその語義を検討することである。

上代語においてフタは名詞・動詞を修飾し、形状言を修飾することがない。また形状言アラは名詞を下接するか、形容詞・動詞の語根の一部となるが、独立して用いられることはない。そこでフタアラヤマのもととの語構成は、フタアラ・ヤマでなくフタ・アラヤマであったと考えるのが自然である。つまり「二つの、荒い山」の義である。後にそれが言い習わされて、フタアラが連語のように意識され、「フタアラのヤマ、フタラのヤマ」とも呼ばれ、そこにいます神を「フタラノ神」(延喜式九条家本)とも呼ぶようになったということになる。

そのフタは二と解され、古来の説にいうように現在の男体山・女峰山を並べてとらえたのだと思われる。万葉集にも大和と越中の二上山がみえ、また紀路の妹背の山や常陸の筑波山もみえて二峰を男女一対としてとらえた観念の存在が知られる。常陸国風土記にも筑波山の二峰の一を「雄の神」と呼んでいる。並ぶ二峰を男女の山としてとらえる思考は古代において一般的であった。延喜式神名帳にも二(フタ)は神社名の中に、「葛木二上神社」(大和国葛下郡)、「二見神社」(同宇智郡)、「二俣神社」(陸奥国桃生郡、周防国都濃郡)、「二方神社」(但馬国二方郡)、「二上神社」(因幡国巨濃郡)などとみえている。

ではアラ山とは何であろう。上代語アラは、形状言として名詞を下接し、また形容詞・動詞の語根ともなつて多くの言葉を派生している。『時代別国語大辞典上代編』の掲出語を参考に、上代の文献から得られるそれらの主要なものを今、次のように分類、一覧にしてみる(アラの表記は「荒」で統一する)。

地勢に関する語	荒野・荒山・荒山中・荒山道・荒田
地名	荒津
自然現象に関する語	荒風・荒波・荒潮
生物に関する語	荒木・荒草・荒熊
物・施設に関する語	荒籠・荒妙・荒玉・荒床・荒城
神霊に関する語	荒御魂・荒人神
人に関する語	荒雄
形容詞	荒し

#### 動詞

荒す・荒ぶ・荒びる

各用例をながめてみると、上代語アラはただ客観的に荒々しい、粗いなどの意味をもつばかりでなくて、人間の側からする神霊への畏怖の感情を含んでいる。人為の及ばない、あるいは人為を超えた自然の状態や現象、また物や物の状態を古代人は神霊の状態・作用として把握したが、その神霊の一つの属性がアラであった。だからアラの属性をもつものを、人は恐れ敬わなければならない。たとえば「荒野」は人手の入らない野であつて、そこは神霊が支配しているゆえに、人からすれば荒涼としている。地名「荒津」は荒々しい属性をもつた神の支配する港の意だから、「神さぶる荒津の崎に寄する波」(万葉集卷十五・三六六〇)、「荒津の海われ幣まつり齋ひてむ」(同十二・三二一七)、と、「神さぶる」といわれ、幣を奉るべき地である。

「荒波・荒潮」という自然現象も、海の神霊によって引き起こされるものであり、「荒風」もまた神のしわざにはかならない。「いづの真屋に鹿草をいづの席と苅り敷きて」(出雲国造神賀詞)とある「鹿草」は神聖な敷物になる材料としての、霊威のこもつた野生の草である。山から切り出してきたばかりの加工前の木は、やはり霊威こもる「荒木」である。「大目鹿籠」にこもつて彦火火出見尊は海に出かけたが(神代紀下一書)、その「鹿籠」は目が粗いというばかりでなく無事に海の旅のできる威力ある乗り物であつた。

さて、「真木の立つ荒山中」(万葉集卷三・二四〇)などとあらわされる「荒山」も、杉や檜を生やす荒ぶる神霊の領する山であり、その顕現として荒涼とし、荒々しいのである。平野の奥に秀でた高さを持ち、人を寄せつけない男体・女峰の二峰も、古代の人々にはまさに「荒山」の名にふさわしいと感じられたのだろう。

また、記紀・風土記には、「荒神」「荒ぶる神」が多く登場している。「荒神」と出ているものも一般に「荒ぶる神」と訓まれているが、アラガミという訓もあつたかもしれない。その「荒神」「荒ぶる神」は、記紀では地方の山河にいて荒れすさび、神武天皇や倭建命に平定される悪神であり、風土記ではやはり地方神で多く交通を妨害する神としてあらわれている。延喜式神名帳の中にも「荒」(アラ)を含む神社名が「荒木神社」(伊豆国田方郡、丹波国天田郡)、「荒島神社」(越前国大野

郡)、「荒坂神社」(因幡国法美郡)など二十ばかり数えられ、これらに含まれるアラも靈威の強いという意味をもつはずである。中でも「大荒比古神社」(近江国高島郡)などはオホ・アラと形状言が二つ重なる語構成で、フタ・アラを考える場合の参考になる。

古代の人々が男体・女峰の二山を対でとらえ、そこに荒ぶる神霊を感得し畏怖して「二つの荒い山」と呼んだのが「二荒山」の語義であろう。結局、前引「二荒山神傳にいう、「或は曰く、鷓草神武の際、二神有りと云ふ。共に夫婦と為りて、国神と名づく。蓋し荒神なり。故に山の名を二荒と云ふ。神居る所を以てなり」という説が趣旨を正しくとらえていると考える。

なお、先述のように近藤喜博氏は、「アラ(荒)」を「現われている」と解し、つまり「男体・女貌の二山が顕現している」意味だとしているが、「アラ」の「荒」という表記や中心的な語義を考えれば、強いて「現われている」の意味に導く必要はない。

#### 四 二荒から補陀落へ

それでは、荒ぶる神霊のいます山としての二荒山はどのようにして観音浄土たる補陀洛山とみなされるようになったか。

前引、和歌森太郎氏の論は「補陀落」から「二荒」への変化を説くものだが、男体山を補陀洛ととらえたのには関東の仏教修行者一般がかかわったと論じていて参考になる。奈良時代、関東の山林修行者たちの中で、フタアラないしフタラとの音の類似がまず補陀洛に重なったであろう。先述のように、フダラクはフタラ・フダラなども称されたので、山名フタアラないしフタラはそれとほぼ同音であった。山林修行者たちにとって、この音の類似は偶合であったにしても、二荒山を仏教化していくにはすこぶる好都合であったにちがいない。また、二荒山周辺はそうして補陀洛と観想されるのにふさわしい自然相を備えていた。

以上のことから、空海の筆になる「沙門勝道山水を歴て玄珠を瑩く碑」の読解からもある程度導かれることのように思われる。

下野の国出身、沙門勝道の男体山初登頂とその周辺の仏教化を賞揚する趣旨のこの碑文には、「粵に同じき州に補陀洛山あり」、「師、補陀洛の山に上つて祈祷す」、「洛山」と三度まで男体山を「補陀洛山」と記している。そもそもこの碑文は、勝道自身が下野の国博士を勤めた伊氏(何人か不明)を通じて、伊氏によしみがあり都に著名な空海に作文を求めて成ったものであった。その間の事情を記す文に、

前の下野の伊博士公、法師と善し、秩満して京に入る。時に法師勝境の記すること無きことを歎いて属文を余が筆に要す。伊公、余に与す、故に固辞すれども免れず。虚に課せて毫を抽づ。(日本古典文学大系『三教指帰 性霊集』による。以下同じ)

とあり、また、余と道公と生年より相見ず。幸に伊博士公に因つて其の情素の雅致を聞き、兼ねて洛山の記を請ふことを蒙る。余不才なれども仁に当る。敢へて辞讓せず。輒ち拙詞を抽でて並に絹素の上に書す。

とある。勝道自身が男体山を補陀洛山として、その勝境を「洛山の記」として作文してくれるよう、伊博士を通じて空海に依頼したというのである。ちなみに、この碑文の全体を読むと、勝道の三、四度に及ぶ登攀の年月やそのようす、男体山周辺の地誌、また湖畔での修行生活のありさまが具体的に詳しく、むろん全体に空海によつて美文的修辭もほどこされているとはいえ、筆をおろす空海の手もとはほかならぬ勝道自身の手になるかなり具体的、詳細に記された資料が届けられていたのだと思われ<sup>9)</sup>。この点からも、二荒山は勝道において補陀洛山と眺められていたとしてよいであろう。

するとここで、二荒山を補陀洛と観じたのは、勝道上人自身の宗教体験によるものであったかという考えに誘われる。碑文によれば、勝道は二十歳代の若きに男体山登攀を思い立ち、神護景雲元年(七六七)四月に試みたが二十一日間山腹ですごして却き、十四年後の天応元年(七八一)四月、再び試みて失敗し、そして翌二年三月、命がけに試みてついに宿願を果たしたのだった。それは勝道三十代後半のことであつたらう。そして空海の文は、勝道の目に映じたその男体山頂からの四方の眺めを感動的に点綴している。二年後の延暦三年(七八四)三月にも勝道は南湖

(中禪寺湖)に到つてその勝景を賞で、神宮寺を建立して四年間住し、さらに湖の北涯に移り住んだと記す。後に上野国の講師に任じられたことなどはあるが、また大同二年(八〇七)、早魃の時には上人、下野の国司の依頼に応じてまた補陀洛山に登つて祈祷し、雨を降らせたとす。まことに勝道は生涯を男体山の信仰と開発にかけたので、開山の師というにふさわしい。やはり碑文によれば、勝道が到るまではその山は、「魑魅通ふこと罕なり、人蹊也絶えたり。借問、古より未だ攀ち躋る者有らず」、つまり人跡未踏のさまであったという。その勝道の登攀の辛苦と山における長年の修行体験の中でこそ、「二荒山」が「補陀洛山」と劇的に結びついた可能性——。その主旨を江戸末期の日光山誌の文に借りれば、

伝へいふ、此山を補陀洛山と名付られし事ハ、往昔開祖上人当山草創多年の間、屢観音の靈験を被り玉ひ、殊に延暦三年登山し玉ひ、西湖の南岸に於て、大士の影響を感じまして、ミづから其尊容を手刻して安置し玉ひ、かつ上人情思惟し玉ふに、二荒各処の山中にして、観音薩埵の種々の奇瑞を示し玉ふこと、是ただ吾信力のみならず、当山は必ず大士有縁の靈境なるべしと悟らせ玉ひ、大士のすみ玉ふ南海の補陀洛山を此所に標頭して、即ち当山を補陀洛山と名付給へるよし。(神道大系本による)

ただし碑文は、「粵に同じき州に補陀洛山あり」、「師、補陀洛の山に上つて祈祷す」と、勝道以前からその山は補陀洛山と呼ばれていたかのごとくに記している。また碑文は、勝道の目に映じた男体山とその周辺の勝景を活写はするが、補陀洛の縁起には常套的に語られる観音の示現は記さず、また勝道が観音像を祀ったことなども記していない。日光山誌には、「殊に延暦三年登山し玉ひ、西湖の南岸に於て、大士の影響を感じまして、ミづから其尊容を手刻して安置し玉ひ」などと、勝道が観音の示現を目にし、その姿を手刻したという伝承を記す。その初見は、現存の文献では鎌倉時代の補陀洛山建立修行日記にみられる。それより古い平安末期成立の中禪寺私記には、勝道が男体山の中腹に中禪寺を建立し、丈六の千手観音像を安置したこと、また中禪寺湖の西岸に十六丈千手観音石像が祀られ、山門の題額に空海の手で「補陀洛山発心壇門」と書されたという伝承が記されてはい

る。しかし、いずれも後に起こった伝えとすべきだろう。それらの古書をたどると、ありがちなように、開山上人勝道の事績が時代を経るごとに増幅していくさまが看取とられ、先に引いた日光山誌の文などはいわば、そうして時代時代に生じた伝承が集合し、鍍込まれたようなおもむきがある。伝承の問題としてそれはそれで興味深いのだが、歴史の事実としてはやはり二荒山を補陀洛山と見たのは、勝道個人とするよりは、当時の関東の山林修行者たちであったとすべきだろう。

そうして実際、二荒山周辺の自然相は補陀洛と観想されるにふさわしかった。碑文には、男体山および男体山頂から眺めた三つの湖、中でも南湖の勝景がとくに詳述されている。それも「洛山の記」としてであり、空海の筆には補陀洛の景観が意識されているというべきであろう。中禪寺私記にも、中禪寺湖の西岸の祭祀に関して、

湖の西岸に十六丈の千手観音の石像有り。千手崎と曰ふ。山門の題額に「補陀洛山発心壇門」と書す。是則ち山勢の相似を為すに依りて、観音利生の場なり。件の額は弘法大師の手書なり。(神道体系本による。原漢文)

とあり、「弘法大師の手書なり」というのは伝承にすぎないとしても、「山勢の相似を為す」によってそこが補陀洛山とされたという見方がみえる。

そもそも經典では、本来の補陀洛山は次のように描かれている。新訳華嚴經によれば、「補陀洛迦」山は「華果樹林皆遍満し、泉流池沼悉く具足」し、山の「西面の巖谷の中」で「観自在菩薩、金剛寶石の上に結跏趺坐」して説法している(卷六十八、大正蔵十)。玄奘の大唐西域記には、「布呬洛迦山」を「山径危険、巖谷敲傾。山頂に池有り。其の水澄鏡にして大河を流出す。周流山を繞ること二十匝にして南海に入る。池の側に石天宮有り。観自在菩薩往来遊舎す」とある(卷十。大正蔵五十二)。本来の補陀洛山は海辺の山ないし島であるが、その景観は高山とともに華果樹林・泉流池沼・巖谷・山頂の池などで表象されている。男体山の場合とはくに山と湖とが「山勢の相似を為す」と感得されたのだろう。五来重氏が、もともとあった中禪寺湖の水神信仰が当地の千手観音の信仰になっていったので、「二荒山の信仰は山岳信仰であるとともに湖水信仰である」と中禪寺湖の信仰に注意を喚起しているのはこの点で注意される。それにしても、山と湖(あるいは海)が勝景

をなすほどの地なら、日本にはほかに多くあつたろう。中でとくに北関東の日光に補陀洛が現出したのは、やはり地名に因由するところが大きかったからではないだろうか。

こうして、「二荒山」は補陀洛化していった。

ちなみに、二荒山は男体・女峰の二山をさしたと先に述べた。しかし「二荒山」から転じた「補陀洛山」は、碑文の書き方からすれば男体山一峰をさしていると思われる。これは、山頂遺跡のあり方において、女峰山・太郎山など周囲の山々に比べ「遺跡の年代の上限と継続期間に関しては」「男体山が突出して古く、継続の期間が著しく長」く、出土遺物の内容においても「量質とも男体山が突出し、種類が極めて豊富である」ということから知られるように、男体山の方が主峰と見なされたこと、また男体山とその周辺の自然相が本来の補陀洛に近いとみなされたことなどによるだろう。先述のように「中禪寺私記」には勝道による男体山中腹への千手観音像安置を伝え、後の三所権現の信仰においても男体山の本地を千手観音、女体山の本地を阿弥陀如来とする。

## 五 おわりに

山の名はもとフタアヤマないしフタラヤマといわれ、「二荒山」の字が宛てられた。それは日光山地の前面に位置する二峰を男女の対なる、荒ぶる霊峰と仰いだゆえの呼称であった。この人里離れ、気象も激しい高山は人の接近を拒絶するようだったが、しかし古墳時代にも登攀する人々は時々にあつたようで、彼らは山を祀り、そして人知れず去っていった。奈良時代になって関東の山々にも山林修行する人々が集まり、山の仏教化が行われた時代、フタアラ、フタラは彼らによっていつしか観音浄土の補陀洛の音と重ねられ、山の自然相もまたそれにふさわしいと観想された。中で勝道という若い修行者が辛苦の末に仏教者として初めての登攀を果たし、中禪寺湖のそばで数年信仰生活を送った。彼は後にその体験を碑文に残そうと、都に著名な空海のもとへ文章を依頼し、その碑文の制作によって東の補陀洛山の名は広く知られるようになった。

日光はそうして一つの補陀洛となった。初発においてフタアラ、フタラ（二荒）の名が補陀洛と響き合ったこと、そこに日光が補陀洛とされた要諦があつたように思われる。

しかしその後の歴史において、日光の補陀洛は、たとえば熊野の那智のように、あるいは中国舟山群島の普陀山、またチベットラサのポタラ宮のように観音信仰の実績を示していない。平安・鎌倉期には、千手観音の示現譚が語られ、観音像の安置や寺の設営などのことも行なわれたし、近世期には「補陀洛船」で中禪寺湖を船で一周する「浜禪頂」の行事も行われたけれども、それも観音信仰が一山をおおような勢いとはならなかった。たとえば至徳元年（一三八四）成立の日光山縁起（新編会津風土記所収本など）には、男体山は千手観音、女体山は阿弥陀如来、太郎山は馬頭観音として三所権現を語るが、「補陀洛」の文字はただ一カ所、太郎大明神が河内郡小寺山に移って「若補陀洛大明神」と号されたという所に見えるのみである。歴史の実際の進行によつたことではあるけれども、日光の補陀洛信仰はけつして日光山の信仰のすべてではなく、その一部、あるいは一つの基礎をなすにとどまったというべきであろう。それも信仰の初発が、フタアラ、フタラ（二荒）の名が補陀洛と響き合ったという一つの偶合にあつたためではないか。けれども、逆にいえば、名称の偶合は何よりも有力な、永久に消えることのない、日光が補陀洛であることの証左なのでもあつた。

## 注

- (1) 細矢藤策「二荒山神社の日神信仰（二）——太郎・日光・野口 サン・ライン（一）——」、『野州国文学』五三、一九九四年三月
- (2) 藤井万喜太「日光開山勝道上人の再検討（七）」、『下野史談』昭和一四年二月号
- (3) 和歌森太郎「日光修験の成立」、山岳宗教史研究叢書1『山岳宗教の成立と展開』所収、初出は一九六九年
- (4) 五来重『修験道入門』八二、八三頁、一九八〇年
- (5) 大和久震平『古代山岳遺跡の研究』二二五、四四二頁など、一九九〇年
- (6) 華厳経探玄記に「通多羅山」がみえる。また、長秋記、天承元年（一一三二）七月八日条に、「補陀羅山」の図が鳥羽離宮の成菩提院北面の壁に描かれたともある。
- (7) 岡田米夫『日本史小百科1 神社』、一九七七年、に「フタラはもと太荒神（たあらかみ）で」とみえ

- る。
- (8) 古代語アラについて、古橋信孝『古代和歌の発生』(一九八八年)にも、「本来は始源的な、靈力が強く発動している状態をあらわすことば」という考察がある(二八頁)。
- (9) 参考、『日光市史』上巻第二編第一章、益田宗氏執筆、一九七九年
- (10) 注(4)の書、九八頁など
- (11) 注(5)の書、四五七頁
- (12) 柴田立史『日光山の入峰修行——華供峰を中心として——』、山岳宗教史研究叢書8『日光山と関東の修験道』所収、一九七九年

## Mount Futara, Nikkou, Viewed from the Meanings of the Name

KANNO Tomikazu

**Abstract :** Nikkou in Tochigi Prefecture is famous in Japan, together with Kumano. Above all, Mt. Nantai has been thought of as the Fudarakusen. Its history ascends to the Nara Era, and it has been said that Priest Shoudou from Shimotsuke is connected with the origin of the name. There are various opinions about the reason why a mountain of North Kantou was said to be Fudarakusen, the place where Kannon lives, from an early era.

Mt. Nantai was called Mt.Futara in the old days, and it has been conventionally said that the old name was derived from Fudaraku. I think, however, that this theory has problems both historically and linguistically. My view is this : Mt. Futara was the mountain's name originally, meaning "two rough mountains". But because the name accidentally sounded similar to Fudaraku, and also because the natural environment around the mountain suited the name Fudaraku, Buddhist ascetics in those days named Mt.Nantai, Mt Fudaraku.